

令和4年7月28日
農推第1210-4号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

6月から8月は農薬危害防止運動月間です。農薬の安全かつ適正な使用を徹底し、農薬の使用に伴う事故・被害を防止しましょう。

発生に注意！（8月）

バラ科果樹（もも、すもも、うめ等）

クビアカツヤカミキリ

- 幼虫は、幹や枝から中華麺～うどん状のフラス（木くず等の混合物）を出します。フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫しましょう。
- ネット被覆している場合は、ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマーなどで殺虫しましょう。
- 発生地域では、モスピラン顆粒水溶剤など成虫対象の登録薬剤を散布しましょう。

果樹類全般

果樹カメムシ類

- チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害します。
- 発生量や加害時期は年、ほ場により変動するので、カメムシ類の活動が活発になる夕方に園内を見回り、飛来を確認したら、速やかに薬剤散布を行ってください。
- 発生を認めたら、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤（かんきつ、もも、かき、なしなど）、アーデント水和剤（もも、なしなど）などを散布してください。多発時には、残効性が比較的高いピレスロイド系薬剤、ネオニコチノイド系薬剤を中心に散布しましょう。
- 薬剤散布は夕方か早朝に行うと効果的です。

野菜類・花き類

シロイチモジヨトウ

- ねぎでの発生が多いですが、その他にしゅんぎく、なす科野菜、あぶらな科野菜、豆類、きく、花き類など多くの作物を加害します。
- 発生初期（若齢幼虫期）の防除を徹底してください。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努めましょう。
- 発生を認めたら、コテツフロアブル（ねぎなど）、ロムダンフロアブル（ねぎ、花き類・観葉植物など）、ベネビアOD（ねぎなど）などを散布しましょう。
- 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行ってください。

オオタバコガ

- 果実や茎などに食入します。被害痕のまわりに虫糞が確認されることが多いです。
- 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応してください。
- 発生を認めたら、プレバソフロアブル5（なす、トマト、ミニトマト、とうもろこしなど）、スピノエース顆粒水和剤（なす、トマト、ミニトマト、きくなど）、プレオフロアブル（なす、トマト、ミニトマト、未成熟ともろこし、花き類・観葉植物など）などを散布する。

次回の情報は8月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」<http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>**※農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。**

病害虫の発生予報（8月）

水稲

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水 稲			いもち病		
			縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)		
			紋枯病		
	ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）				
			トビイロウンカ		
				斑点米カメムシ類	

果樹

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
ぶ ど う	べと病				
	褐斑病				
	晩腐病				
			チャノキイロ アザミウマ		
				フタテン ヒメヨコバイ	
も も		せん孔細菌病			
			シンクイムシ類		
バラ科果樹	クビアカツヤカミキリ（発生に注意）				
み か ん		黒点病			
		ミカンハダニ			
			ミカンサビダニ		
果樹類全般				果樹カメムシ類	

野菜(なす)

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
な す		すすかび病			
		うどんこ病			
		アザミウマ類			

花き(きく)

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
花き(きく)	黒斑病・褐斑病				
		アザミウマ類			

野菜類・花き類

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
野菜類 花き類				シロイチモジヨトウ	
			ハスモンヨトウ		
			コナガ		
				オオタバコガ	
				アブラムシ類	
		ミナミキイロアザミウマ			
			コナジラミ類		

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

水稻

いもち病



葉いもち

特徴

- ◆ 低温多湿で日照不足の時に発生しやすく、降雨、窒素過多、過繁茂などの場合に助長される。

防除のポイント

- ◆ いもち病の常発ほ場で箱施用剤を使用していない場合は、発生前にオリゼメート粒剤、コラトップ粒剤5、ゴウケツノサンプラス粒剤、ゴウケツノサンプラスパックなどを散布する。
- ◆ 発生を認めたらブラシフロアブルなどを散布する。

縞葉枯病（ヒメトビウンカ）



ヒメトビウンカ

縞葉枯病発病株

特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介される。
- ◆ り病株では、新葉が垂れ下がって枯死する（ゆうれい症状）。

防除のポイント

- ◆ ヒメトビウンカが増殖しないように、周辺のイネ科雑草の除草を行う。
- ◆ 発生が多い場合は、アプロード水和剤、スタークルノアルバリン粒剤、エクシードフロアブルなどを散布する。

紋枯病



紋枯病発病株

特徴

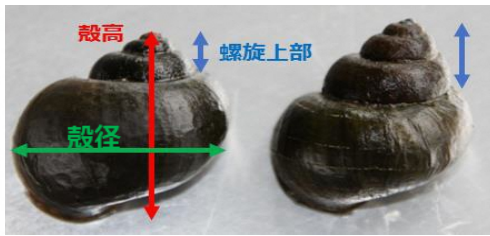
- ◆ 水際の葉鞘部分に楕円形の病斑ができる。
- ◆ 病原菌は糸状菌の一種で高温(28~32℃)、多湿時に多発する。

防除のポイント

- ◆ 窒素肥料の過用、遅い追肥は避ける。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、モンガリット粒剤などを散布する。

注) 水稻では、モンガリット粒剤は使用時期が「収穫45日前まで」なので使用時に注意する。

ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）

ジャンボタニシ
(スクミリンゴガイ)

ジャンボタニシ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7 cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである（上部写真参考）。
- ◆ 主に田植え直後（約20日後まで）の苗が食害され、欠株になる。

防除のポイント

- ◆ ピンク色の卵塊を発見した場合は、水中に掻き落とす。



卵塊

カラー技術資料「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）から稲を守りましょう！」についてもご参照ください。
<http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

トビイロウンカ



トビイロウンカ成虫



トビイロウンカ幼虫



トビイロウンカによる坪枯れ症状

特徴

- ◆ 6月下旬～7月上旬の梅雨時期に中国大陸から長翅型成虫（飛来世代）が日本に飛来する。
- ◆ 水田に着地したトビイロウンカは分けつ期のイネの株元に住み着き、茎の表面に産卵する。
- ◆ 卵は1週間ほどで孵化し、幼虫（第1世代）は親と同じくイネの株元で、その師管液を吸汁して成長する。その後、数回の脱皮を経て成虫となる。第2世代、第3世代が繁殖し、出穂期以降に多発すると坪枯れ症状が生じる。

防除のポイント

- ◆ トビイロウンカは稲の株元（水際）に生息するので、稲の株元を叩くなどして発生しているかを確認する。
- ◆ 発生が見られたら、**エクシードフロアブル**、**エミリアフロアブル**、**スタークル／アルバリン粒剤**などを散布する。

詳細は、病害虫カラー技術資料
 「水稲 トビイロウンカの防除 改訂版 R4.3」を参照。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tobi iro/R4tobi iro_manual.pdf

斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、イネホソミドリカスミカメ（旧名：アカヒゲホソミドリカスミカメ）、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ 畦畔のイネ科雑草などから飛来する。
- ◆ 薬剤散布は出穂期に行う。

防除のポイント

- ◆ 出穂10日前までにほ場周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。出穂前後の畦畔の除草はカメムシ類を水田に追い込むため、なるべく実施しない。
- ◆ 出穂期に、トレボン乳剤、スミチオン乳剤、スタークル／アルバリン粒剤など散布する。乳剤や水溶剤、フロアブル剤などの散布剤は、株元まで届くように丁寧に散布する。

果樹

ぶどう

べと病

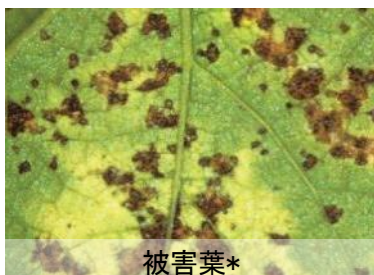


べと病の葉裏の症状

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、被害葉を速やかに取り除くとともに、エトフィンフロアブル、レーバスフロアブルなどを散布する。なお、収穫前日数をよく確認してから使用する。
- ◆ 農薬を散布する際は、葉害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。
- ◆ 収穫後に ICボルドー66D、ICボルドー48Qなどを散布する。

褐斑病



被害葉*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウエア等に発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 枯枝や落葉、被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーなどを散布する。なお、収穫前日数をよく確認してから使用する。

注) ネクスターフロアブル、フルーツセイバーを幼果期以降に使用する場合は、果粉溶脱を生じるおそれがある。

晩腐病



被害果※

特徴

- ◆ 糖度が高くなった収穫間際の果実に発生しやすい。
- ◆ デラウエアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きひげなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 笠かけや袋かけを行う。
- ◆ フルーツセイバー、オンリーワンフロアブルなどを予防的に散布する。
注) フルーツセイバーを幼果期以降に使用する場合は、果粉溶脱を生じるおそれがある。

チャノキイロアザミウマ

チャノキイロアザミウマ
被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカットなどの大粒系品種で被害が大きいのので注意する。

防除のポイント

- ◆ ディアナWDG、ヨーバルフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

フタテンヒメヨコバイ



フタテンヒメヨコバイの被害 *

特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

防除のポイント

- ◆ 園周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ スタークル/アルバリン顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤などを散布する。

もも

せん孔細菌病



被害果

特徴

- ◆ 降雨、強風によって発生が助長される。
- ◆ 果実は幼果～未熟果期に感染しやすい。

防除のポイント

- ◆ 収穫後も伝染源となる発病枝などは取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

シンクイムシ類



シンクイムシ類被害果

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 収穫後も被害果実や被害枝は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

バラ科果樹（もも、うめ、すもも等）

クビアカツヤカミキリ



特徴

- ◆ 成虫は体長2～4 cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に出現。
- ◆ 幼虫は樹木内部を食い荒らし、枯死させる。3月下旬から中華麺～うどん状のフラス（木くず等の混合物）を出す。
- ◆ フラスが出ている穴の周辺に幼虫がいる可能性が高い。
- ◆ **若齢幼虫はうどんよりも細い（中華麺状）フラスを出すことがあり、この時期の防除が効果的。**



被害枝



ネット被覆(さくら)

防除のポイント

- ◆ フラスが見られた樹は、ネットを巻き付けるなど成虫の拡散を防ぐ対策をとる。ネットは4mm目合いのものを、高さ2m程度まで2重に口をしっかりと巻く。ネットを樹幹に密着させると成虫がネットを噛み切ることがあるので、樹幹との間に余裕を持たせる。
- ◆ ネット被覆している場合は、ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマーなどで殺虫する。
- ◆ 伐採後の切り株についても、ネットやビニルシート等で2重に覆い、成虫が拡散することを防ぐ。
- ◆ フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ 発生地域では、モスピラン顆粒水溶剤など成虫対象の登録薬剤を散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

温州みかん

黒点病



黒点病被害果

特徴

- ◆ 梅雨時期など雨が続くと発生が増加しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期（梅雨期、秋雨期）に、ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤などを散布する。

注1) ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。

注2) かんきつ（みかんを除く）では、上記3剤とも使用時期が「収穫90日前まで」なので使用時に注意する。

ミカンハダニ



ミカンハダニ被害葉*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、スターマイトプラスフロアブル、ダニエモンフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 薬液は葉裏にもよくかかるように散布する。

ミカンサビダニ



ミカンサビダニ被害果*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 近年、一部地域で発生パターンが変化し、9月になってから多発する場合がある。7月に薬剤を散布しても被害が発生する場合は、9月上～中旬にコテツフロアブル、ダニカット乳剤20、ダニエモンフロアブルなどを再度散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

果樹類全般

果樹カメムシ類

※作物毎に登録内容が異なるのでラベル等で確認すること。



チャバネアオカメムシ※

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生量や加害時期は年、ほ場により変動するので、カメムシ類の活動が活発になる夕方に園内を見回り、飛来を確認したら、速やかに薬剤散布を行う。
- ◆ 発生を認めたら、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤（かんきつ、もも、かき、なしなど）、アーデント水和剤（もも、なしなど）などを散布する。多発時には、残効性が比較的高いピレスロイド系薬剤、ネオニコチノイド系薬剤を中心に散布する。
- ◆ 薬剤散布は夕方か早朝に行うと効果的である。

令和4年7月6日発出の病害虫発生予察注意報第1号「果樹カメムシ類」についてもご参照ください。

[http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/chuui/2207_chuuihou01\(ka_jukamemushi\)_soshin.pdf](http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/chuui/2207_chuuihou01(ka_jukamemushi)_soshin.pdf)

野菜

なす

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は早めに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、スコア顆粒水和剤、プロポーズ顆粒水和剤、ストロビーフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

うどんこ病



葉の病斑

特徴

- ◆ 窒素過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、パンチョT F顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤、プロパティフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 葉裏、花、幼果（へたの下）に多い。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、アフーム乳剤、ファインセーブフロアブル、モベントフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.8mmの赤色ネット又は0.4mmの白色ネットを展開する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ 栽培終了後に太陽熱消毒を行い、施設内のアザミウマ類を殺虫する。

キャベツ

根こぶ病



根こぶ病によるしおれ症状と生育不良*

特徴

- ◆ 根に大小様々なこぶができる。発病が激しいと枯死する。

防除のポイント

- ◆ アブラナ科野菜の連作を避ける。
- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 石灰質肥料を施用して、土壤酸度をpH6.5～7.2に矯正する。
- ◆ 早植えを避ける。
- ◆ ネビリュウ、オラクル粉剤、ランマンフロアブルなどを施用する。

きく

黒斑病、褐斑病



葉の病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ◆ ダコニール1000、ストロビーフロアブルなどを散布し、予防に努める。発生を認めたら、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤などを散布する。

注1) ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので、着色期以降の散布はさける。薬液による汚れが生じるおそれがあるので、収穫間際の散布はさける。また、かぶれに注意する。

注2) ストロビーフロアブルは、高温多湿下で薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 花卉にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマ等が発生し、葉には主にクロゲハナアザミウマ等が発生しやすい。
- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス病（きくえそ病、きく茎えそ病）を媒介する。

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設開口部に目合い0.8mmの赤色ネット又は0.4mmの白色ネットを展張する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

野菜類・花き類

※適用作物は一部を抜粋して記載しています。
使用にあたっては、ラベルの登録内容を確認してください。

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、その他しゅんぎく、なす科野菜、あぶらな科野菜、豆類、きく、花き類など多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期（若齢幼虫期）に防除を徹底する。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、コテツフロアブル（ねぎなど）、ロムダンフロアブル（ねぎ、花き類・観葉植物など）、プレオフロアブル（ねぎなど）などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

令和4年7月15日発出の病害虫防除情報「シロイチモジヨトウに注意！」についてもご参照ください。
[http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/boujyoyouhou/2207_bojo03\(shiroichimojiyotou\)_soshin.pdf](http://www.jppn.ne.jp/osaka/R4th/boujyoyouhou/2207_bojo03(shiroichimojiyotou)_soshin.pdf)

ハスモンヨトウ



ハスモンヨトウ幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといもなど多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 老齢幼虫の防除は困難なので、発生初期（若齢幼虫期）に防除を徹底する。卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、トレボン乳剤（さといも、えだまめなど）、アニキ乳剤（さといも、なす、トマト、きゅうりなど）、プレバソソフロアブル5（さといも、なすなど）などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ヨトウムシ類については「ヨトウムシ類の見分け方」をご参照ください。

http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/yoto/yoto_1.pdf

コナガ



成虫※



幼虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC（非結球あぶらな科葉菜類など）、デルフィン顆粒水和剤（野菜類）などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫糞が確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、捕殺等も含めて早めに対応する。
- ◆ 発生を認めたら、プレバソソフロアブル5（なす、トマト、ミニトマト、とうもろこしなど）、スピノエース顆粒水和剤（なす、トマト、ミニトマト、きくなど）、プレオフロアブル（なす、トマト、ミニトマト、未成熟ともろこし、花き類・観葉植物など）などを散布する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介する。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、コルト顆粒水和剤（なす、きゅうり、トマト、花き類・観葉植物など）、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤（なす、きゅうりなど）、ウララDF（なす、きゅうり、トマト、非結球あぶらな科葉菜類など）などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ミナミキイロアザミウマ



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みや、周囲からの飛び込みによる発生が多く見られる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマは、きゅうり黄化えそ病などのウイルス病を媒介する。

防除のポイント

- ◆ 育苗期後半～定植当日に、アベイル粒剤 ●（きゅうり、なすなど）、モベントフロアブル ●（きゅうり、なすなど）などを施用する。
- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤 ●（きゅうり、なす、トマトなど）、アフーム乳剤 ●（きゅうり、なす、花き類・観葉植物など）、ベストガード水溶剤（きゅうり、なすなど）などを散布する。

● はアザミウマ類で登録

コナジラミ類



タバココナジラミ※

特徴

- ◆ すず病、タバココナジラミによるウイルス病（トマト黄化葉巻病、きゅうり退緑黄化病）の媒介など様々な被害を引き起こす。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病は感染すると株ごと除去する以外に対策がないので、発病株はほ場外に持ち出し処分するとともに、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmの白色ネットを展張する。
- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ グレーシア乳剤（きゅうり、トマトなど）、アフーム乳剤（きゅうり、トマト、なすなど）、ウララDF（きゅうり、トマト、なすなど）などを散布する。
- ◆ 栽培終了後、ハウスを密閉し、ハウス内の作物残さや雑草に残る虫を殺虫する。

●病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。